

「経済成長とともに、

中国でもCFPが必要とされる時代がくる。

自分の親にしてあげるようなサービスを、

母国にも提供したい」

「中国にないものを中国に持つていくというのが、日本に来たときから持ち続けている私の考えでした」

汪さんは、語る。

「面接に来たとき、山崎所長に『これこそぞうだよ！』って言われたんです」

中国が成長するのに、CFPが必要となるときが必ず来る――そんな考えが、山崎所長のビジョンと合致し、汪さんは入社を決めた。貿易関係の仕事をしてきた経験を生かし、現在は中国関係の業務を担当する。

「先日は、福建省の税務局幹部の方たちが来て、日本の税務の勉強会をしました。広東省の企業経営者の人たちも、日本の中小企業の技術について勉強したいといってきました。私はそういった方たちのお手伝いをしていくんです」

そんな時代の流れを読み、汪さんは山崎所長へ中国系の新聞に広告を出すことを自ら提案、実施した。日本で起業した中国人経営者に、税金の申告や、経営支援などの手伝いをするためだ。

「所長は『どうぞやりなさい』と応援してくれました。中国の経営者は職人が多いので、経営に詳しくないことがあるんです。それに、日本人の税理士には気を遣って言いたいこともいえない場合がある。その点私には、遠慮なく言えると思うんですね」

現在、汪さんがメインとなり担当する企業は22件。「今は、高齢化が進んでいますので、お年寄りのお客様に、税務とは関係のないお手伝いをすることもあります。保険証の再発行とか、保険料のこととか、県民共済のこととか……雑用を代わりに行うわけですが、やりがいがあるし、モチベーションが上がりますよ」

自分の親にしてあげるような感覚で、常に接したい――汪さんは、そう語る。

「遠い中国で暮らす肉親に接しているのと同じような気分が味わえますし、人情が厚くなるような感覚を与えてもらえる。自分自身の満足感が得られるんです」

「小さなお手伝い」をコツコツ積み重ね――汪さんは今、CFPの取得を目指す。



汪興旺（42歳） 国際部門長 入社11年目

「山崎所長？カッコイイ日本人だなと思いました。ひげが長いところが（笑）。仕事に対しては厳しいですが、失敗してもいいからと必ず応援してくれる人ですね」